

# 英語における発音の競合現象について

村 上 丘

## 0. はじめに

本稿では、英語における発音と表記との対応関係を考察する。特に、発音の競合現象に焦点を当てる。発音の競合現象とは、2種類のあい異なる発音が、同一の表記に対応する現象をさす。発音と表記は、本来、異なる言語記述のレベルに属する。発音が、ひとつの記号体系であるとするれば、表記は、上位の記号体系である。したがって、発音と表記との対応を処理するにあつては、語同士、文同士など、同一レベルの言語現象を記述する場合とは異なる方略が必要となることが予想される。

本稿では、次の前提に基づき議論を展開する。

第一。言語現象には、＜有標＞である事項と、＜無標＞である事項とが対立して存在する場合がある。＜有標＞と＜無標＞の言語現象を同時に観察することにより、しばしば、一方の言語現象のみに注目する考察からでは得られない示唆を得ることができる。

このことは、発音と表記との対応に関しても適合する。ある表記に2種類の発音が対応する事例は、枚挙にいとまがない。しかし、それら2種類の発音は、言語体系の中で、互いに同等の位置を占めているわけではなく、一方が、＜有標＞の役割を演じ、他方が、＜無標＞の役割を演じている場合がしばしば観察される。

第二。カテゴリーに関するアリストテレス以来の考え方の根底には、次の様な前提があった(Taylor 1995: 22-24)。<sup>①</sup>カテゴリーは、素性の必要十分条件で規定される。<sup>②</sup>素性は、2項対立関係を構成する。<sup>③</sup>カテゴリー同士は、明確な境界線を有する。<sup>④</sup>カテゴリーに属するすべての成員は、同等の資格を有する。

昨今、とみに注目されているプロトタイプ論においては、これらの前提に対し、異議を申し立て、次のような前提が設定されている。<sup>①</sup>カテゴリーの境界は連続的である。<sup>②</sup>カテゴリーの成員は、プロトタイプに近いものもあれば、それとかけ離れた周辺的なものもあり、段階性がある。本稿においては、このようなプロトタイプ論の前提を受け入れ、あるカテゴリーに属する成員の属性を、プロトタイプと、そうでないものとに区分して、記述する。

本稿の目的は、次の4点を明らかにすることである。

- (1) <sup>①</sup> 英語における発音と表記の関係に焦点を絞り、競合言語要素と非競合言語要素の分布を記述する。
- <sup>②</sup> 競合言語要素と非競合言語要素の相互関係を＜有標＞と＜無標＞との観点から確定し、その通時的な含意を考察する。
- <sup>③</sup> ＜有標＞および＜無標＞として特徴付けられる言語要素の集合の中に見られるプロトタイプ

を検出する。

- ④ レベル横断的な記述を可能にするモデルを設定し、その理論的含意を確定する。

## 1. <部分重複>

周知の事実であるが、英語における発音と表記とは、一対一に対応しない。発音と表記との間の不整合に関する事例は多岐にわたる。しかし、この事実は、発音と表記との対応がまったく無秩序であることを意味するわけではない。

たとえば、特定の表記が、2つの異なる発音に対応するばかりでなく、それが、その2つの発音と同時に対応する場合が観察される。すなわち、特定の表記と発音との対応に関し、次の3つの現象が同時に存在することが、しばしば、観察される。

- (2) ① 大部分の<無標>の単語において、表記<x>がある一定の発音/y/に対応する。

- ② 少数の<有標>の単語において、表記<x>が発音/z/に対応する。

- ③ 極一部の<有標>の単語において、表記<x>が上記2つの発音/y/ /z/に対応する。

その例として、次の資料を観察しよう。(本稿では、Carney (1997) に従い、表記を<...>で、発音を/.../で表記する。)

(3)

	無 標	有 標	競 合
語末における<-et>	/-et/ (bullet)	/-ei/ (ballet)	/-et, -ei/ (beret)
語末における<-ade>	/-eid/ (lemonade)	/-a:d/ (ballade)	/-eid, -a:d/ (promenade)
語末における<-ado>	/-eidou/ (tornado)	/-a:dou/ (avocado)	/-eidou, -a:dou/ (esperado)
語末における<-ato>	/-eltou/ (potato)	/-a:tou/ (obbligato)	/-eltou, -a:tou/ (tomato)
語末における<-ed>	/-d/ rugged	/-id/ ragged	/-d, -id/ legged

競合形式においては、同一の表記に対応して、2つの発音が存在する。(2通りの発音形式のうち、それぞれのいずれを<有標><無標>と確定するためには、より緻密な作業が必要であるが、それに関しては、後述する。) これら2つの発音は、周辺の環境から、その実現を予測できない変異形があるので、<自由変異>である。しかし、上記の資料における<自由変異>は、その場限りのものではなく、既存の形式が、特定の語彙において二重に生起している<部分重複>と解釈することができる。<部分重複>は、競合現象が、その場限りのもの、例外的なもの、説明のつかないものではなく、動機付けのあるものであることを示す。発音と表記との間に存在するこのような関係性は、統一的なモデルのもとで処理すべきであると考えられる。

音声と表記の間だけでなく、言語のさまざまなレベルにおいて、1つの言語要素が生じる環境に、2つ以上のあい異なる言語要素が、競合して存在する現象がしばしば観察される。このような競合現象は、通例、<交替>という用語で処理される。しかし、それは、共時的なレベルにおける言説であって、通時的なレベルにおける意義を無視することはできない。この点に関し、Fisiak



(1993:3) は、つぎのようにいう。The occurrence of two competing forms in language use is an unambiguous sign of language change in progress.

＜部分重複＞の検出は、それ自身、何らかの言語要素の分布の探索であり、純粹に、共時的考察である。しかし、実質的に、その分布は、通例、通時的、地理的考察と密接に関連する。何故なら、あらゆる＜部分重複＞の分布は、言語変化の所産であるからである。それは、既存の形式が、他の領域へ、＜類推＞によって拡張された結果生じた二重構造である。＜部分重複＞の検出、すなわち、2つの競合する言語要素の存在の確認は、言語変化が、進行中であることを示す、何よりの証拠である。その意味で、＜部分重複＞は、時間的には、共時的分析を通時的考察に結合し、空間的には、言語の多様性と一様性とを連結する、プリズムである。

## 2. ＜対＞のモデル

ここで、＜対＞(pair) という概念を導入しよう。(この概念は、村上(1996a,1996b,1997) における一連の論考の過程で明確化されつつあるものであり、最終的なものではない。)

(4) 範列関係を有する言語要素  $x$  と  $y$  に関し、次のような条件が整備されたと仮定する。

- ①  $x$  と連辞的(あるいは、対応) 関係を有する集合を  $P$  とする。
- ②  $y$  と連辞的(あるいは、対応) 関係を有する集合を  $Q$  とする。
- ③  $P$  と  $Q$  の共通部分を  $C$  とする。

(5) 言語要素  $x$  と  $y$  は、＜対＞をなすと次のような特性を持つ。

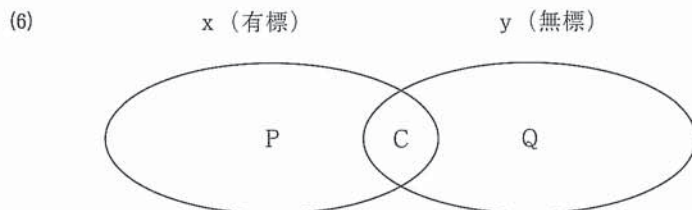
- ①  $x$  と  $y$  は、有標と無標として特徴づけられる。
- ②  $P$  と  $Q$  は、典型性と周辺性を有する。

連辞的關係を有する場合は、同一レベル内における記述をさし、対応関係を有する場合は、異レベル間における記述をさす。例えば、接尾辞と接尾辞を比較し、それと共起する語基の集合を規定する場合は、連辞的關係に当たる。一方、音声と表記の關係は、それぞれの属する言語レベルが異なるので、対応關係に当たる。

＜無標形式＞と＜有標形式＞は、それ自身、範列的關係を構成する言語形式であるので、2項対立機能を有する。しかし、その形式と連辞的關係(あるいは、対応關係)を有する言語記号は、両形式に、排他的に属するわけではない。すなわち、＜無標＞と＜有標＞に特徴づけられた成員は、相互排他的ではなく、部分的に共存する。2つの集合に共通して属する成員が、＜競合形式＞として具現する。この共存領域は、集合論的には、＜部分重複＞(partial overlapping)、すなわち、2つの集合の＜交わり＞(intersection) として、位置づけることができる。

＜典型性＞は、通例、ある特定の上位語とそれに属する下位語との關係との間において樹立する。例えば、birdの成員は、robin, canary, swallowなどである、という。その場合、下位語は、開かれた集合であり、当初から、閉じられた集合ではない。しかし、上記のモデルにおいては、当該の2項と連辞的關係(あるいは対応關係)を結ぶ言語要素の集合、というふうに、その成員が、言語的制約下のもとにあり、閉じられている。閉じられた集合の中で、常に、＜典型性＞が抽出可能である保証はない。形式的類似性は、必ずしも(意味、音声、語源など)非形式的基盤によって、動機づけられているとは限らないからである。したがって、＜対＞における＜典型性＞の抽出は、理論的に必須の要件ではなく、記述的に可能である場合に限る。

これを、モデルで表すと、以下のように図式化することができる。



### 3. 言語のレベル

一組の言語要素が、＜対＞として樹立されるためには、どの言語レベルにおけるにせよ、＜範列関係＞(paradigmatic relation)を満足しなければならない。言語要素同士が結ぶ＜範列関係＞は、表記、発音、形態など、さまざまなレベルにおいて、設定することができる。

- (7) a. 表記のレベル (graphic level)  
 b. 発音のレベル (phonic level)  
 c. 形態のレベル (morphological level)

表記のレベルにおける＜対＞は、同一の意味を有し、異なる表記の変異形 (graphic variant) が存在する場合に、設定することができる (ex. cigaret～cigarette)。この場合、発音も同一である。

発音のレベルにおける＜対＞は、同一の意味を有し、異なる発音の変異形 (phonic variant) が存在する場合に、設定することができる (ex. tomato/et~ɑ:/)。この場合、表記も同一である。

形態のレベルにおける＜対＞は、同一の意味を有し、異なる形式の接尾辞が共存する場合に、設定することができる (ex. humanness～humanity)。このような場合、通例、言語学では、形態の変異形 (morphological variant) という用語を使わない。それは、これらの接尾辞が、形態論的に規定された異形態ではないことが一つの要因であろう。しかし、これらは、明らかに、言語体系の中で範列的關係を構成する。したがって、本稿では、これらも、＜対＞の候補の資格を有するとみなす。

構造言語学では、＜自然相的 (エティック)＞(etic) という用語がしばしば使われた。

- (8) a. 異音 (allophone)  
 b. 異書記体 (allograph)  
 c. 異形態 (allomorph)

(8)によって具現化される＜自然相的 (エティック)＞の概念は、かならず、＜文化相的 (イーミック)＞(emic) の概念を措定する。しかし、＜対＞として措定された2つの事項は、どのレベルの記述であるにせよ、＜文化相的 (イーミック)＞な観点による記述を前提していない。＜対＞をなす事項は、より抽象的な理論的構築物を設定するための素材ではなく、それ自身、リアリティを持った観察対象であり、さらにより原始的な構造に還元できない実体である。

このようなく変異形＞は、通例、特定の語彙における＜自由変異＞として処理され、一般的原則の埒外にあるものとされる。しかし、＜自由変異＞は、果たして、正当に言語学で扱われてきたのだろうか。それは、近年、社会言語学の台頭で、固有のレジスターと連動するという指摘はされても、言語学本来の領域における処遇は、依然として、不十分であると考えられる。なぜなら、＜自由変異＞の関係にあるそれぞれの言語要素を比較し、それらのいずれかをより基本的、もう一方を派生的とする解決案、あるいは、それらのいずれとも異なる抽象的な構築物を基本的であるとする解決案は、



いずれも、言語の実相から、かけ離れているからである。＜自由変異＞の関係にある言語要素は、(たとえ、それらが、＜有標＞と＜無標＞という非対称性を有するにせよ、) 言語要素の実態としては対等であり、固有の価値を有している。

本稿では、これらの＜変異形＞は、散発的、個別的現象ではなく、特定の語彙的特徴に支配されるにしても、ある程度の一般的原則を反映したものであると主張する。

具体的には、次のようなく対＞を想定することができる。

(9) a. レヴェル間対 (interlevel pair) : 発音と表記の対応

b. レヴェル内対 (intralevel pair) : 形態と形態との関係, 文と文との関係

本稿においては、考察の対象を前者、特に、同一発音に対応することとなる表記法に限定し、他の＜対＞に関しては、稿を改めて論ずることにする。2つの表記法は、発音のレヴェルでは同一であるので、これを、＜発音対＞と呼ぶことにする。

#### 4. ＜発音対＞ (phonic pair)

＜同形異義語＞ (homograph) と呼ばれる現象がある。これには、2つあって、一つは、発音が同じである場合 (ex. (fair (market) : fair (fine)) と、発音が異なる場合 (ex. (bass (fish) : base (the lowest male singing voice)) がある。しかし、これらの語は、発音のレヴェルにおける＜対＞の資格を有さない。なぜなら、これらの語は、意味的にまったく無縁の語であるため、範列的關係を結ばないからである。

発音のレヴェルにおける＜対＞は、既に述べたように、類似する意味と同一の表記を有し、異なる発音の交替形 (phonic alternant) が存在する場合に、設定することができる。本稿では、＜tomato＞/təma:tou~təmeɪtu/のような発音の交替形、すなわち、＜同綴り異音同義語＞が、＜部分重複＞の個所に該当する場合を考察の対象とする。

##### 4-1. 語末における＜-et＞の発音

語末における表記＜-et＞は、次のように、/ɪt/の発音に対応する場合と、/eɪ/の発音に対応する場合がある (CIDE469)。(本稿では、Carney (1997) に従い、表記と音声とが対応する場合、≡の記号を使用する。)

(10) a. ＜-et＞≡/ɪt/ (ex. bullet/bulɪt/)

b. ＜-et＞≡/eɪ/ (ex. ballet/bæleɪ/)

表記＜-et＞に対応する発音を、共時論的に、すなわち、音韻的に予測することはできない。何故なら、pocket/parquet, bullet/balletのように、当該の個所の音韻的な環境が類似していても、実際には、異なる発音が対応する場合があるからである。

(10a) は、語末に現れる子音表記が、音声面では、尾子音 (coda) の対応形を持ち、表記形式と発音とが対応している。数量的に、大部分の語がこのタイプに属するので、これは＜無標＞の場合である。一方、(10b) は、(黙字tを含み) 表記形式から発音を予測できず、一部の語がこれに属する＜有標＞の場合である。(この表記を含む語は、文節音の発音だけではなく、強勢の配置に関しても、異なる分布を示す。しかし、ここでは、文節音の相違にのみ議論を限定する。) 便宜的に、次のように規定する。

(11) 語末に言語表記＜-et＞を含む語において、

a. 当該の個所が、/əɪ/あるいは/ɪt/の発音に対応する語の集合をPとする。

b. 当該の個所が、/ei/の発音に対応する語の集合をQとする。

c. 当該の個所が、両者の発音に対応する語の集合をCとする。

それぞれの集合に属する成員を以下に示す。括弧内の数字は、寺沢編『英語語源辞典』による、文献初出年代である。

Pの成員は、次のとおりである。

- (12) a. 13C: comet (1200)  
b. 14C: target (1300), hatchet (1307), cricket (1325), bonnet (1338),  
closet (1385), racket (1385), wallet (1385)  
c. 15C: packet (1450), helmet (1450), jacket (1451)  
d. 16C: bullet (1557), ticket (1528), toilet (1540)

Qの成員は、次のとおりである。

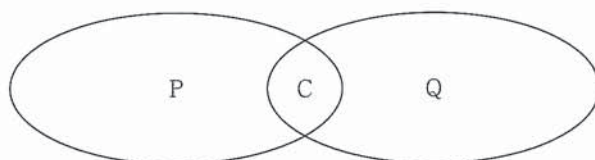
- (13) a. 17C: cabaret (1632), cachet (1636), ballet (1667)  
b. 18C: duvet (1758), bidet (1766), chalet (1782), buffet (1792)  
c. 19C: parquet (1816), gourmet (1820), bouquet (1846), crochet (1846),  
croquet (1858)

Cの成員は、以下のとおりである。

- (14) a. 14C: fillet (a1399)  
b. 15C: valet (a1400)  
c. 16C: sorbet (1587)  
d. 18C: ricochet (1769)

これを図式化すると以下のようになる。

- (15)            /-it/ (無標)                      /-ei/ (有標)



上記の分布から、次のようなことを帰結することができよう。

- (16) ① 語末に-etが来る語において、/it/と発音される語は、＜無標＞であり、/ei/と発音される語は、＜有標＞である。  
② 発音/it/を有する語の典型性は、14世紀においてフランス語から借用されたという事実である。  
③ 発音/it/を有する語の周辺性は、13世紀、および、15～16世紀にかけてフランス語から借用されたという事実である。  
④ 発音/ei/を有する語の典型性は、19世紀にフランス語から借用されたという事実である。  
⑤ 発音/ei/を有する語の周辺性は、17～18世紀にかけてフランス語から借用されたという事実である。  
⑥ 重複部分においては、＜有標＞の事項の＜典型性＞と＜周辺性＞、＜無標＞の事項の＜周辺性＞が混在している。

注目すべき点は、重複部分において検出できるのは、それぞれの集合の周遍的性質だけではない、という点である。たとえば、Cに属する fillet は、有標の発音/ei/の典型性《19C》からは著しく逸

脱するが、無標の発音/ɪt/の典型性《14C》には合致する。

#### 4-2. 語尾における<-ade>の発音について

<-ade><-ada><-ado>の表記を持つ語は、3音節以上の多音節語である。これらの語において、後ろから2番目の母音の位置における<-a->の表記は、/ɑ:/と/eɪ/の発音に対応する。これから3つの節（4-2, 4-3, 4-4）においては、これらの表記とそれに対応する発音について考察する。

表記<-ade>は、次のように、/eɪ/と発音される場合と、/ɑ:/と発音される場合がある。

(17) a. <-ade->≡/eɪd/ (ex. lemonade)

b. <-ade>≡/ɑ:d/ (ex. ballade)

前者は、大部分の語がこれに属する<無標>の場合である。この具現形式は、語末の黙字に先行する子音の前の母音が2重母音化され、英語における綴り字と発音に関する一般的原則の予測するところに合致する。次の単音節語、2音節語、3音節語の事例は、その一半である。

(18) a. shade, made, spade, grade, parade, grade, trade

b. invade, decade, arcade, brigade, evade, pervade

c. persuade, centigrade, dissuade

一方、後者は、形式から発音を予測できず、極一部の語がこれに属する<有標>の場合である。

語末の言語表記<-ade>を有する言語要素の集合は、つぎのように再区分することができる。

(19) 語末に言語表記<-ade>を含む多音節語において、

a. 当該の個所が、/eɪd/として発音される語の集合をPとする。

b. 当該の個所が、/ɑ:d/として発音される語の集合をQとする。

c. 当該の個所が、両者の発音を許す語の集合をCとする。

Pの成員は、以下のとおりである。

(20) a. 16C: marmalade (1524 F), brocade (1563-99 Sp & Port),  
crusade (1577 Sp + F), masquerade (1587 F)

b. 17C: lemonade (1604 F), cascade (1641 F),  
parade (1656 F), serenade (1646 F)

Qの成員は、以下のとおりである。

(21) a. 14C: ballade (c1386 OF)

b. 17~18C: facade (1658-81 F), aubade (1678 OF), roulade (1706 F)

Cの成員は、以下のとおりである。

(22) a. 16C: pomade (1562 F), comrade (1591 F)

promenade (1567 F) /ɑ:/ (BE) /eɪ/ (AE)

b. 17C: rodомontade (1612 F), splanade (1681 F)

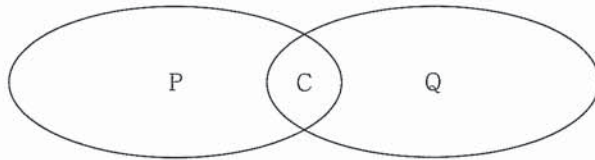
c. 18C: charade (1776 F)

d. 19C: fusillade (1801 F), glissade (1843 F), saccade (1727-41, F)

この現象は、次のようなモデルで、明らかにすることができる。



(23)            /-eid/ (無標)                      /-a:d/ (有標)



上記の現象は、すでに設定した原則に照らし合わせると、次のように記述することができる。

- (24) ① 語末に-adeが来る語において、/eid/と発音される語は、＜無標＞であり、/a:d/と発音される語は、＜有標＞である。
- ② 発音/eid/を有する語の＜典型性＞は、16～17世紀にかけてフランス語から借用されたという事実である。
- ③ 発音/a:d/を有する語の＜典型性＞は、17世紀においてフランス語から借用されたという事実である。
- ④ 発音/a:d/を有する語の＜周辺性＞は、14世紀にフランス語から借用されたという事実である。
- ⑤ 重複部分においては、＜有標＞の事項の＜典型性＞と＜周辺性＞、＜無標＞の事項の＜周辺性＞が混在している。

それぞれの発音を有する語の＜典型性＞は、ほぼ重なっている。このことは、それぞれの集合から抽出された、＜典型性＞自身が、弁別的でないことを意味する。このことは、両者は、きわめて合流しやすい状態にあることをうかがわせる。実際、歴史的に見ると、これらの語の大部分は、/a:d/から/eid/への移行段階を経由してきた。

- (25) The majority have passed through a stage of being pronounced with final /-ard/, but are now normally pronounced with /-eid/. (Burchifield, 1998: 20)
- すなわち、英語においては、当該の個所は、次第に、長母音から二重母音に移行する現象が見受けられる。

#### 4-3. 語末における＜-ado＞

前節において、表記＜-ade＞は、/ei/と発音される場合と、/a:/と発音される場合があり、前者が＜無標＞で、後者が＜有標＞であると規定した。ところで、それと類似した表題の表記＜-ado＞は、次のように、/eidou/と発音される場合と、/a:dou/と発音される場合がある。

- (26) a. ＜-ado＞≡/eidou/ (ex. tornado)  
b. ＜-ado＞≡/a:dou/ (ex. avocado)

しかし、前節と同様に、二重母音の(26a)が＜無標＞、長母音の(26b)が＜有標＞と即断するわけにはいかない。なぜなら、/a:dou/は、/a:d/よりも、音韻論的に、より安定しているからである。実際には、より多くの語が(26b)の形式に属する。したがって、ここでは、(26a)を＜有標＞、(26b)を＜無標＞と規定する。

つぎのようにまとめることができる。

- (27) 語中に言語表記、＜-ado-＞を含む多音節語において、
- a. 当該の個所が、/eidou/として発音される語の集合をPとする。
- b. 当該の個所が、/a:dou/として発音される語の集合をQとする。
- c. 当該の個所が、両者の発音を許す語の集合をCとする。



Pの成員は、以下のとおりである。

- (28) 16C: tornado (1556 Sp), bastinado (1577 Sp), ambuscado (1595 Sp)

Qの成員は、以下のとおりである。

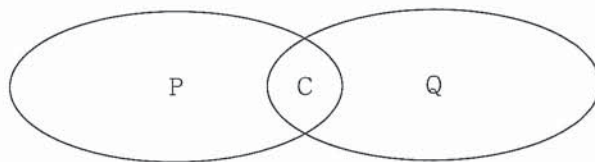
- (29) 16C: bravado (1503 Sp)  
17C: desesperado (1610 OSp), avocado (1697 Sp)  
18C: mikado (1727 Jp)  
19C: incommunicado (1844 SP)

Cの成員は、以下のとおりである。

- (30) esperado (1610 OSp) /a:/ (BE) /ei/ (AE)

この現象は、次のようなモデルで、明らかにすることができる。

- (31)            /-eidou/ (有標)            /-a:dou/ (無標)



上記の現象は、すでに設定した原則に照らし合わせると、次のように記述することができる。

- (32) ① 語末に-adoが来る外来語において、/a:dou/と発音される語は<無標>であり、/eidou/と発音される語は<有標>である。  
② 発音/a:dou/を有する語の典型性を抽出することは困難である。  
③ 発音/ei:dou/を有する語の典型性は、16世紀にスペイン語から借用された語であることである。

これらの語の大部分は、<ade>/-a:d/ /-eid/とは異なり、明瞭な二重母音への移行を示さない。

- (33) A number of -ado words remain firmly in the language: normally pronounced with /-a:dou/. (Burchifield, 1998: 26)

その理由の一つは、上記に示したように、有標と無標との位置づけが異なることが考えられる。

#### 4-4. 語中における<-ato>

多音節語に現れる<-ato>は、次のように、/eitou/と発音される場合と、/a:tou/と発音される場合がある。

- (34) a. <-ato> ≡ /eitou/ (ex. potato)  
b. <-ato> ≡ /a:tou/ (ex. obbligato)

前者は、ごく少数の語がこれに属する<有標>の場合である。次のような、2音節語も存在するが、いずれも固有名詞である。

- (35) Plato, Cato

一方、後者は、かなり多くの語がこれに属する<無標>の場合である。  
つぎのようにまとめることができる。

- (36) 語中に言語表記、<-ato->を含む多音節語において、  
a. 該当の個所が、/eitou/として発音される語の集合をPとする。  
b. 該当の個所が、/a:tou/として発音される語の集合をQとする。

c. 該当の個所が、両者の発音を許す語の集合を R とする。

P の成員は、以下のとおりである。

(37) potato (1565 Sp.-N. Am. Ind.)

Q の成員は、以下のとおりである。(これ以外に vibrato, moderato などが属するが、寺沢 (編) には不掲載。)

(38) 18C : obbligato (1724 It), staccato (1724 It)

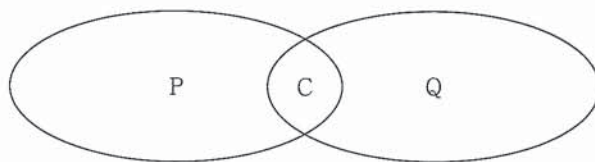
19C : pizzicato (1845 It)

C の成員は、以下のとおりである。

(39) tomato (1604 Sp. - N. Am. Ind.) /a:/ (BE) /eɪ/ (AE)

この現象は、次のようなモデルで、明らかにすることができる。

(40) /eɪtu/ (有標) /a:tu/ (無標)



上記の現象は、すでに設定した原則に照らし合わせると、次のように記述することができる。

- (41) ① 語末に -ato が来る外来語において、/eɪtu/ と発音される語は〈有標〉であり、/a:tu/ と発音される語は〈無標〉である。
- ② 発音 /eɪtu/ を有する語の〈典型性〉は、16 世紀に借用した (北部アメリカインディアン語起源の) スペイン語であることである。
- ③ 発音 /a:tu/ を有する語の〈典型性〉は、18 世紀から 19 世紀にかけてイタリア語から借用したことである。
- ④ 重複部分においては、発音 /eɪtu/ を有する語の〈典型性〉と一致する。

#### 4-5. 語末における〈-ed〉の発音

接辞〈-ed〉は、動詞に付加し、過去、過去分詞形を作る場合と、名詞に付加し、形容詞を作る場合とがある。その場合、〈-ed〉の個所が、音節性を有し、/ɪd/ と発音される場合、音節性を有さず、/t//d/ と発音される場合がある。通例、当該の個所には、/d//t//ɪd/ が、相補分布的に具現するので、/ɪd/ の具現は、通例、音韻的に予測することができる。しかしながら、この一般的原則に反し、音韻的に /t/ あるいは /d/ が予測される環境において、/ɪd/ が生ずる現象が、若干、観察される。その現象に関しては、当該の非音韻的要因が何であるかを特定する必要がある。

表記〈-ed〉は、次のように、音節性を有さない場合と、音韻的予測に反して、音節性を有する場合がある。

(42) a. 〈-ed〉≡ /t//d/ (ex. marked)

b. 〈-ed〉≡ /ɪd/ (ex. naked)

前者は、大部分の語がこれに属する〈無標〉の場合である。この具現形式は有声と無声との場合があるが、両者の分布は音韻規則の予測するところである。一方、後者は、文脈形式から当該の発音を予測できず、極一部の語がこれに属する〈有標〉の場合である。

便宜的に、次のように規定する。



(43) 語末に<-ed>を含む語において、

- a. 当該の個所が、音節性を有さない形容詞の集合をPとする。
- b. 当該の個所が、(音韻論的予測に反し)音節性を有する形容詞の集合をQとする。
- c. 当該の個所が、両型を許容する形容詞の集合をCとする。

(ここで、名詞派生語である形容詞に制限したのは、<対>の成員を制限するためである。動詞派生語をも含めると、規則変化をする動詞のすべてがその成員の候補になり、処理に困難を来すと予測される。)

Pの成員は、次のとおりである。

(44) OE: marked (OE) (cf. markedly), stringed (late OE), walled (late OE),  
towered (c1400 OE), ringed (OE), hooked (late OE)

ME: striped (1615 ME)

OF: experienced (1569 OF), titled (1602 OF), forced (1542 OF),  
coloured (c1380 OF), diseased (a1398 OF), masked (1583 F)

Qの成員は、次のとおりである。

(45) OE: naked (OE), wretched (<wretch OE), ragged (<rag OE),  
wicked (<wicca OE), dogged (<dog OE)

OF: sacred (c1380 OF)

ON: crooked (<krokr ON)

Cの成員は、次のとおりである。

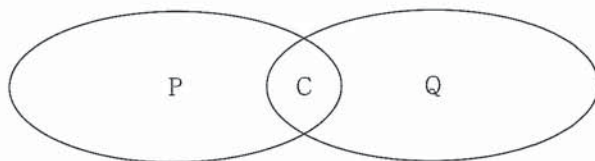
(46) 14C: beloved (c1370 <belove ME)

15C: aged (c1410 <ageOF), legged (1470 <legON)

Cでは、周知のように、発音の形式に応じ、意味が異なる。一般に、名詞は、<-ed>が付加することによって、非段階的な形容詞になる (ex. honeyed, walled)。しかし、Qの crooked, ragged あるいはCの agedのように、発音が音節性を有する<有標>な語に関しては、段階的な形容詞が形成される (Quirk et al. 1985:1553)。Cと同様の振る舞いをするものに blessed, cursed, learned, accusedがあるが、これらは動詞の派生語である。これらの無標発音は、動詞の過去(分詞)形を表し、有標発音は、形容詞的意味をになう。これらの初出年代は、いずれも、13世紀から14世紀である。

これらの関係を図式化すると、以下のように示すことができよう。

(47)                      非音節性(無標)                      音節性(有標)



上記の記述をまとめると、以下のようになる。

- (48) ① 語末に-edが来る形容詞において、音韻規則に従って/-t/あるいは/-d/と発音される語は<無標>であり、音韻規則の予測に反して/-ɪd/と発音される語は<有標>である。
- ② <無標>の発音を有する語の典型性は、後期古英語、あるいは、16世紀頃フランス語から借用したことである。
- ③ <有標>の発音を有する語の典型性は、古英語起源の語であり、語末が軟口蓋音であること

である。

- ④ 重複部分における語の典型性は、＜無標＞の発音を有する語の典型性と一致する。

## 5. ま と め

本稿において規定された＜対＞の概念は、以下に示すように、一見、相反する概念を包含した複合概念である。もし、この概念が言語の記述に有効であるなら、それは、言語自身が、一面的な記述を拒む、多面性を有しているからと考えることができる。

### ① 対称性と非対称性

＜対＞のモデルにおいて、2つの異なる集合が、一部重複しながら、対等に置かれている。2つの集合は、一方の集合に理論的な比重が置かれているということはないので、構造的に対称的である。（このことは、それぞれの集合に属する成員の数が同等であることを含意しない。）しかし、2つの集合を規定する2つの事項は、＜有標＞と＜無標＞という非対称的な2項対立関係を結ぶ。

### ② 段階性と非段階性

集合とは、定義上、当該の特徴を有するものと、そうでないものとを明確に分割する。その意味で、当該の集合に属する成員と、そうでないものとの間には、明瞭な断絶があり、非段階性がある。しかし、それぞれの集合に属する成員間には、より、典型的なものと、そうでないものとの間に、連続性、段階性がある。

### ③ 不変性と動態性

非重複部分に属する成員は、当該の言語要素とのみ共起するので、一様性、等質性がある。一方、重複部分に属する成員は、2つの言語要素との共起を許すので、多様性、混質性がある。前者は、言語の静態的、恒常的な部分である。一方、後者は、言語の動的、変動的な部分である。すなわち、重複部分は、空間的には言語の変異、時間的には言語の変化を示す部分である。

### ④ 共時性と通時性

相補分布、あるいは、重複分布は、共時的な観点から規定される。すなわち、当該の2要素とシンタグマテックな関係を有するパラダイムとして規定される。しかし、その成員のプロトタイプもまた、共時的に規定されるとは限らない。プロトタイプが、通時的要因によって規定される場合もありうる。＜対＞は、時間を越境する。

### ⑤ 同一レベル性と異質レベル性

同一品詞の語と語、同一文型の文と文など、＜対＞は、同一の言語レベルに属する言語要素同士を対峙させる。しかし、必ずしもそうとは限らない。たとえば、異なる範疇に属する語同士、異なる文型に属する文同士を対峙させたり、音声と表記というふうに、異なる言語レベルに属する言語要素同士を対峙させる場合もありうる。＜対＞は、言語レベルを越境する。

### ⑥ 主観性と客観性

＜対＞の候補となる2項を選択する作業自身が、実は、客観的な裏付けのあるものではない。通例、反意関係、同義関係などを持つ2項が選択されるが、類義関係となると、話し手によって異同があるからである。また、＜対＞は、必ずしも、構造的に、同型のものだけを結ぶとは限らないので、その選択は、個人差が多く反映されると予測される。しかし、いったん選択された2項と共起関係を結ぶ言語要素のリストは、かなり、客観的に規定される。音素、形態素間の線的配列は、安定性のある規則性を持つ。しかし、それらのリストに内在する典型性の抽出となると、再び、主観的要因が関与する。



## References

- Burchfield, R. W. 1998. *The New Fowler's Modern English Usage*. Oxford University Press.
- Cambridge International Dictionary of English. 1995. Cambridge University Press.
- Carney, Edward. 1997. *English Spelling*. Routledge.
- Crystal, David. 1988. *The English Language*. The Penguin Books.
- Fisiak, J. 1993. *An Outline History of English*. 英潮社
- Greenbaum, S and Janet Whichcut. 1988. *Longman Guide to English Usage*.
- 郡司利男 (編) 1976. 『英語学習逆引き辞典』開文社出版.
- 『辞典盤Pro』1997. アスキー出版局.
- Lyons, John. *Semantics I*. Cambridge University Press.
- Mitton, Roger. 1996. *English Spelling and the Computer*. Longman.
- 村上丘. 1996a. 「接辞の分布と意味について」新潟大学教育学部紀要38-1. 73-84.
- 村上丘. 1996b. 「対の概念と英語の文型」第28回白馬夏季言語学会, 口頭発表.
- 村上丘. 1997. 「カテゴリーの衝突—語末における摩擦音の交替を中心に—」新潟大学教育学部紀要39-1. 117-128.
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Taylor, John R. 1995. *Linguistic Categorization*. Second ed. Oxford University Press.
- 寺沢芳雄 (編) 1997. 『英語語源辞典』研究社.
- The Oxford Dictionary & English Usage Guide* 1996. Oxford University Press.
- The Oxford Guide to the English Language*. 1994. Oxford University Press.
- Wells, J.C. 1990. *Longman Pronunciation Dictionary*.